

日義村の文化財 6

長野県木曾郡お<sup>お</sup>玉<sup>だま</sup>の<sup>もり</sup>森遺跡

—平安時代後半の集落—

1982・8

長野県木曾郡日義村教育委員会



## はじめに

日義村では昭和57年度事業として、日義中学校体育館の東側上部に、村営の庭球場を建設することになりました。しかしこの附近一帯は、村内でも大規模なお玉の森遺跡の一部に当たります。過去学校の運動場・体育館・給食室等の建設にあたり何回かの発掘調査も行われています。

これらの調査結果からみても、今回の庭球場設置場所も当然遺跡で、住居址なども埋蔵されていると、推測されましたので、発掘調査をして記録保存を図ることになりました。

村内には、発掘担当者として最適の神村透先生もおりますが、県の埋蔵文化財センターへご転勤になり、前回の発掘担当をしていただいた山下生六先生を、要請しました。先生は再三辞退されましたが、緊急の調査であることを説明し、引受けていただきました。

発掘は、8月に行われ木曾教育会の郷土調査部の先生方、木曾高校地歴部の先生および生徒諸君、村内の庭球部員の皆さんや、中・高生の諸君、楯川小の郷土クラブの小学生諸君などの、ご協力を得て無事終了しました。

遺物の実測・整理・報告書の執筆は、山下生六先生に担当していただきました。発掘の状況や結果については、本報告書をご覧ください。

今回の発掘調査に、直接にまた間接にお世話になった皆さんに、厚くお礼申し上げます。

私たちの先祖がかって生活を営んできたこの地も、その子孫である次代を担う子どもや、住民のために学舎となり、また運動施設となり、感無量なものがあります。これらの先人の礎を、村民一同忘れることなく、心に銘記していきたいと思えます。

昭和58年8月

日義村教育長 今井 秀 夫

## 目 次

はじめに	
今までの調査	1
今回の調査	2
調査の経過	3
51、55、57年度発掘比較図	7
発掘地点実測図	8
A B C各地点断面図	9
21号住居址・遺物実測図および説明	12
22号住居址・遺物実測図および説明	14
23・24号住居址・遺物実測図および説明	17
25号建物址想定図および説明	22
住居址外グリット出土遺物一覧表	24
住居址出土遺物一覧表	25
調査の結果	26
写 真	
調査前の遺跡全景と表土はぎの様子	29
完形の出土品	32
21号関係写真(住居跡と遺物)	33
22号関係写真( " )	35
23号関係写真( " )	38
24号関係写真( " )	40
25号関係写真(建物址 )	44
発掘風景・記念写真	45

## 調査について

### 1. 今までの調査

日義村では、日義小・中学校のある附近一帯を「お玉の森」と呼んでいる。口碑によれば昔この付近に、木曾義仲の四天王の一人樋口次郎兼光の屋敷があったと伝えられている。

この附近は、縄文・また平安・鎌倉期の遺物の散布も多く、お玉の森遺跡と呼ばれ学校の運動場また体育館・給食室などの建設工事のために、過去何回かの発掘調査が行われている。

- 第1回の調査(昭和36年)長谷川悦夫氏により下町の水道工事の際山麓で、縄文中期加曾利E期の住居址。
- 第2回の調査(昭和38年)神村透氏により、宮の越区水道工事中、縄文中期加曾利E期の住居2軒、平安時代住居址4軒が確認され、縄文時代住居址1軒が調査された。
- 第3回の調査(昭和39年)神村透氏により、日義小中学校校庭造成時、急いで調査が行われ、平安時代住居址7軒の発掘調査と、4軒の住居址が確認された。
- 第4回の調査(昭和47年・49年)青沼博之氏により、日義村学校配水池築造地で縄文中期加曾利E期住居址1軒が発掘調査された。
- 第5回の調査(昭和52年)神村透氏により、日義小中学校体育館建設予定地の全面にわたり大規模な発掘調査が行われた。その結果10軒の平安住居址が発掘調査された。
- お玉の森地籍ではないが北西200mの地点で、中部電力資材置場建設地の発掘調査が行われ、縄文前・中期の遺構が神村透氏によって、確認された。
- 第6回の調査(昭和56年)山下生六氏により、日義小中学校給食室建設予定地の全面調査が行われ、平安住居址3軒が発掘調査された。

以上の調査結果から、山麓の沢ぞいに縄文の遺構があり中央部に平安時代の遺構が散在している。(細部については、日義村文化財報告書を参照されたい。)

## 2. 今回の調査（第7回目の調査・昭和57年）

昭和57年度内に、日義村庭球場を造成されることが、決定されたので、急いで造成予定地の発掘調査を行うこととなった。

第5回の調査地籍に現在は立派な体育館と駐車場が完成しているが、今回の発掘調査地点は、上・中・下の三段となった水田で、本年度は水田耕作を中止したので、一面にヨモギ・アカザなどの雑草が生育繁茂した状態になっていた。

この上段をけずり下段へ埋め、平にしてテニスコート3面を造成するという計画である。

日義村教育委員会では、工事に先立って8月に発掘調査を行った。

調査事務局 日義村教育委員会 教育長 今井秀夫 事務局 田中茂・川上清人

調査団 団長 山下生六 調査員 木曾教育会郷土委員会関係 伊深智・山下泰男  
北原正治・寺嶋匡彦・小谷宣夫 木曾高等学校 太田嘉幸・竹中浩

団員 日義村内庭球部員・木曾高等学校地歴部・楢川小学校郷土クラブ  
日義中学校有志・地元日義村また村外の高校生有志。

調査指導協力 長野県埋蔵文化財センター第二部長 神村透 専門主事 百瀬長秀

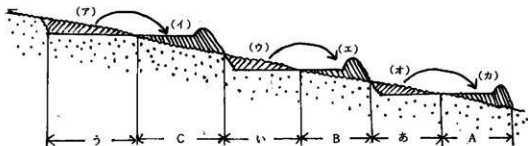
8日間にわたる発掘調査で、期間中の調査団の延人数は330名で、地元日義小学校をはじめ、指導をいただいた神村透氏をはじめ、炎天下で発掘を続行された団員・調査員の方々に、厚くお礼と感謝を申し上げたい。

## 3. 調査の経過

7月、発掘調査のため現地調査、写真撮影を行うも、1メートル内外の雑草のため細部の調査できず。教育委員会の手により、草の刈取りが行われ、上・中・下三段の水田の全容がはっきりとする。

検土杖によりボーリングを実施する。斜面をけずり、田圃3枚を造成しているので下

図のように、(ア)→(イ)・(ウ)→(エ)・(オ)へ、削り取られた土を移動して、底面をたたき固めて水洩れをしないようにして、地業を行っていると思われる。したがって、田圃の造成時に、(あ)・(い)・(う)の地山は削り取られていて、遺跡は破壊され残された(ウ)・(B)・(C)の地点にのみ遺跡が存在すると予想された。



検土杖の調査結果では事実、水田の東側（山側）は、浅く固くすぐ地山となるが、土を盛り上げて造成された西側（体育館側）は、検土杖120cmの長さでは、地山に達することができず、相当深いものと思われた。したがって約3000㎡もある広い面積で、表土の厚い場所がその半分を占める水田の調査を、短期間に行うには、厚い表土を、ユンボで除いてから調査にかかることとし、下段のA地点から表土の取り除きが行われた。併せて各段の水田の各所を試掘して、深さ層位を調査した。中段の南側は傾斜度が深いので、小石や礫を埋めてその上に土を入れて、田の地業を行っており、従って地山までは、深くなっていることが判明した。

8月1日

教育委員会の原図にもとずいて、測量図ができる。東西の基準線を体育館北東の隅として東西線とする。A地点（下段）は表土が除かれているので、グリットを設定する。前回は1辺が3メートルのグリットであったが、今回は1辺が2メートルのグリットとして、1人が1グリットに入って発掘するようにした。

グリットの南北・東西の線は正確に合わせて杭打ちを行った。

8月2・3日（月・火）

両日雨のため発掘作業は行われず。

8月4日（水）

8時30分結団式を行う。教育長今井秀夫氏挨拶、団長山下よりこの遺跡についての説明と、発掘についての諸注意を準備したプリントにもとづいて行った。

グリットのA→Uまでの間の発掘を行う。2メートル四方、4平方メートルの面積

の1グリットを各人で受持ち発掘作業を行ったので、能率よくA地点（下段）の三分の二近くのグリットを発掘することができた。

この間、教育委員会の係により、B地点（中段）の残部の表土取り除き作業が平行して行われた。

G9・10とH9・10とI10のグリットにかかって住居址が発見された、前回の発掘調査までに20号まで確認調査されているので、21号住居址と呼ぶことにした。

V3付近で、鉄製の槍がんならしきものが1本発見された。

陶器片は、灰釉陶器（白瓷）の破片が多く、21号址からは土師の皿の底部破片も出土している。江戸時代の寛永通宝も1枚発見されたが後世に混入したものと思われる。Aグリットいわゆる北側附近から縄文のビットらしきものが見つかり、打製石斧が出土した。本日の参加者35名。

8月5日（木）

本日は、参加人員が多く、A地点（下段）のグリット159ヶ所のほとんどの発掘が終り、一部はB地点（中段）にとりかかった。

北側のビットは、縄文中期の土器片が出土し、縄文の遺構であることが判明した。

21号址から柱穴も見つかり、鉄製の刀子がぼろぼろになって出土している。

住居址の東側附近に数多くのビットがあり、このビットには人頭大の石が3～4個投げ入れられている。C地点（上段）の表土取り除き、運搬は順調に進んでいる。本日の参加者50名。

8月6日（金）

郡下の小・中学校は、夏休み中の中間登校日で、関係の先生方の出席なく参加者は少なかった。C地点にも一部グリットの発掘を開始した。

A地点（下段）C'1・B'1付近は黒土層深く住居址と思われたが、掘り上げた結果そうではなかった。

21号住居址は完全に掘り上げられた。縄文の土構も同様掘り上げられた。

B地点（中段）C地点（上段）のグリットの発掘を続行する。

C地点のA'16・B'16に住居址の一部が見つかったが、この地点は田の東側土手下になり、ユンボにより表土を除かねば、発掘できないので、表土取りを開始したところ、水道管を切断し漏水のため、この地点は、本日止止。小石の多い層である。

本日の参加者31名。



8月7日(土)

一時雷雨があったがすぐ止り作業には、問題がなかった。

C地点のA'16・B'16の地点は、ユンボで厚い表土を取り発掘した結果、大形の住居址であることが判明、当初予想した通りやはり田の東側の土を盛った地点である。

灰釉陶器片の出土も多く完形に近いのも発見された。この住居址を22号住居址と命名する。

B地点(中段)のほぼ中央付近で23号住居址が発見された。西側は田の造成時に一部破壊されている。

A地点の実測が完了した。その結果数多く見つかったピットは、柱穴ではないかと、いう意見もでてくる。柱穴とすればどの様な建物があったかが問題となる。

21号址の刀子は、ボロボロになっているので、石膏取りを行った。

本日の参加者45名。

8月8日(日)

A地点21号址のかまど掘り上げ調査が行われた。この住居址にある柱穴は、住居址の柱穴にしては、位置がおかしい場所であると思われていたが、数多くあるピットの一つと考えた方がよさそうである。

C地点22号址よりほぼ完形に近い灰釉の碗が発見された。

C地点(上段)の北側の土手下に住居址らしきものが見つかる。土手の表土をユンボで取り除く作業を行う。

午後、A地点の数多いピットに水系をはり、調査員全員で検討の結果、柱穴にちがいないということになる。縦穴住居でない高床の柱を建てた住居の存在が確認されたことは、木曾では神坂の中世遺構法明寺遺跡につく2回目の発見であり、意義は大きい25号址とする。

作業終了後、夕立で遺跡一帯水びたしとなる。

本日の参加者は44名。

8月9日(月)

C地点の北側土手下の住居らしきものは、土を取り除き発掘の結果24号址であった。比較的大形の住居であるが、下方は田の造成時に破壊されているので、壁面は流れている。灰釉、土師、須恵の小片が出土している。

23号址掘り上げ終り実測を行う。

楢川小学校の郷土クラブ児童18名参加、小学生の参加は、はじめてである。

朝日・中日の記者取材に訪れる。

断面図作成のために、残された壁面を修正し実測を開始する。参加者56名。

8月10日（火）

主とした発掘調査は終り、残された部分の調査を行うが、住居址などは発見されなかった。断面の実測、住居址などの実測、写真どり。参加者47名。

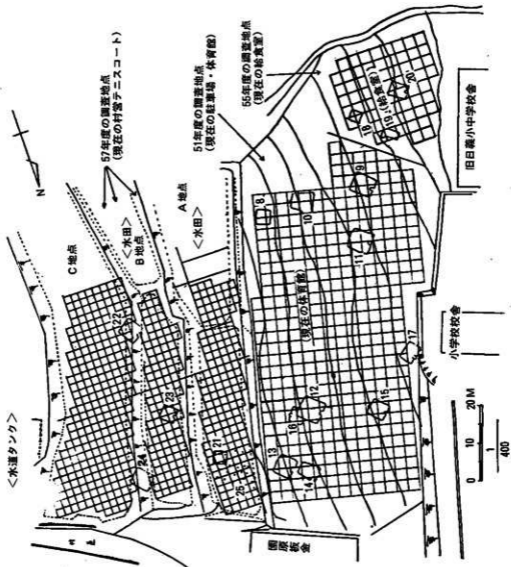
8月11日（水）

残された実測と、写真撮影を完了し、日義中学校の一室を貸りて、出土遺物の水洗い、と、記名を行い、グリット別、住居址別に分類して今回の発掘を完了した。

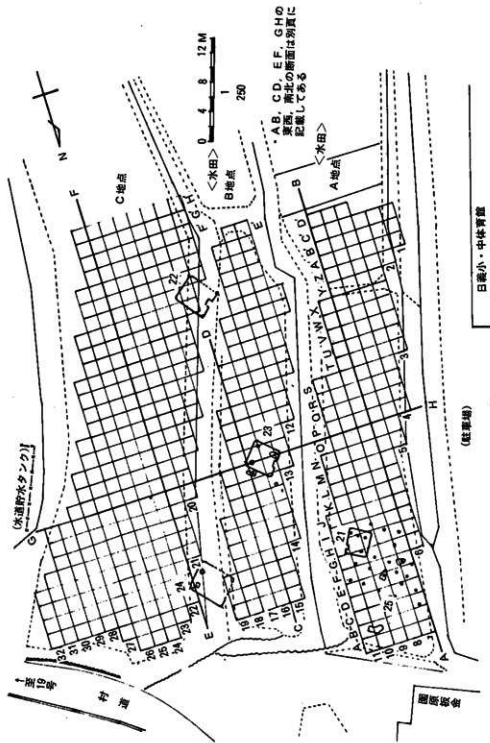
本日の参加者28名、今回の発掘の参加人員は延人員330名であった。一名の怪我人も無く終了したことを喜ぶたい。

その後、出土品の再分類調査、写真撮影を行い、製図を行った。

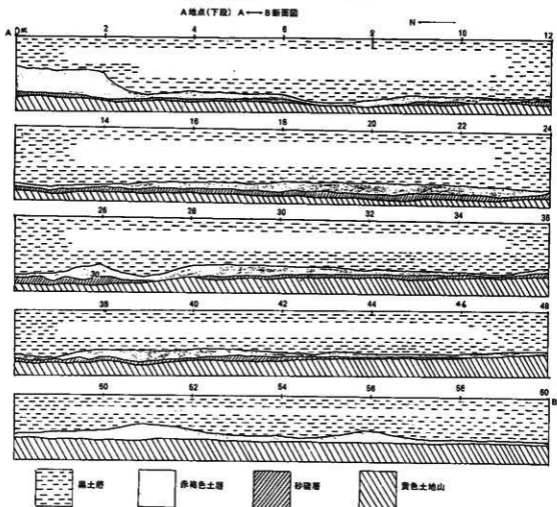
昭和51・55・57年度発掘比較図と住居址



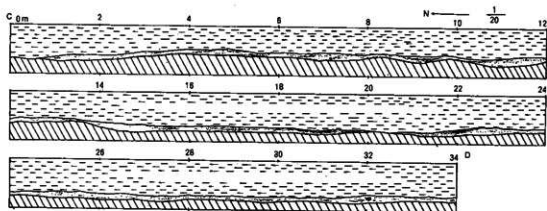
昭和57年度発掘地点実測・遺構分布図



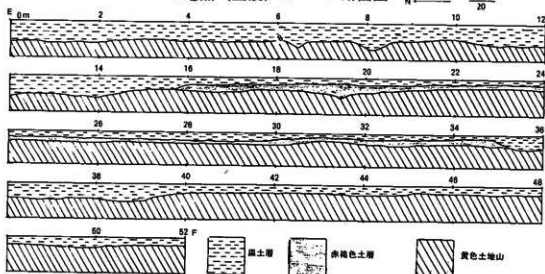
### A地点(下段) A↔B断面图



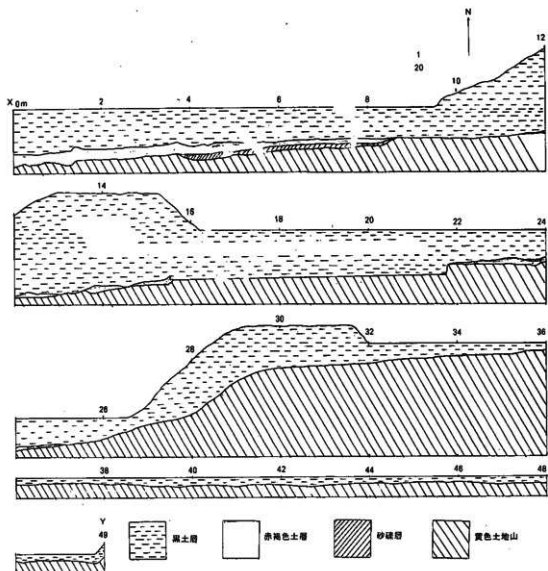
B 地点 (中段) C ← D 断面图



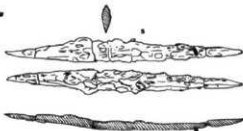
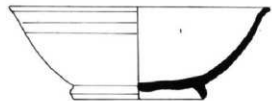
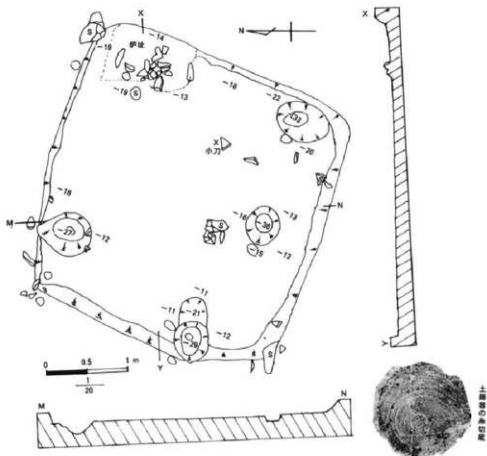
C 地点 (上段) E ← F 断面图



ABC地点(下·中·上段) G↔H断面图



21号住居址実測図



灰輪陶器の概と型



鉄製の小刀子





## 21号住居址

この住居址は、ほぼ方形の隅丸状であり、北西の隅だけは角ばっている。

お玉の森遺跡で今までに発掘調査された多くの住居址は、真北より西へ $42^{\circ}\sim 48^{\circ}$ の角度でふれて建てられているが、21号址は $58^{\circ}$ のふれで建てられている。

小形の住居址で、以前に発掘された、8・18・16号址とはほぼ同じ大きさである。

ほとんどの住居址の炉（かまど址）は西側の中央壁附近にあるが、この住居址は東北部の隅で、写真のように石を両側に積み内側をあけてある。ここで鍋・釜で煮たきをしたものであろう。

柱穴は、図のように4ヶ所発見されているが、住居の柱穴として不自然で、この中西方の2ヶ所は、高床式の建物の柱穴と思われる、この住居より後に掘られたものであろうと、推察される。

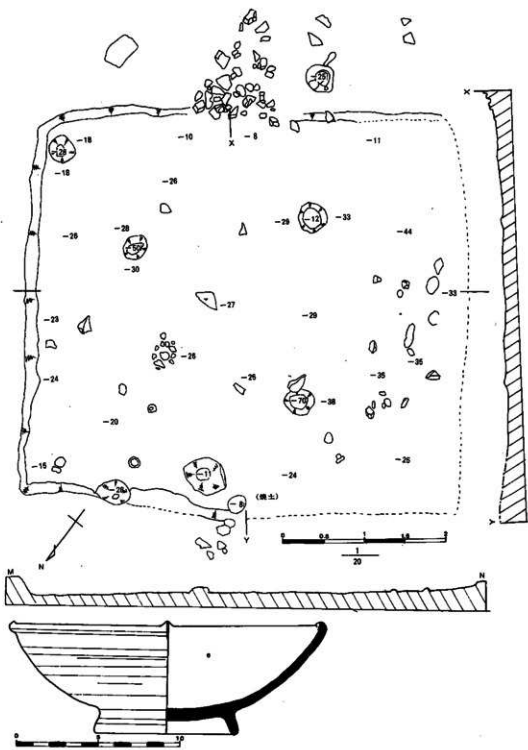
出土品は(1)・(2)・(3)の灰釉陶器の碗と皿の破片が比較的大きいもので、底部の小片が6点出土しているので少なくとも灰釉の器は9点を数えることができる。土師器の出土品は、小碗の(4)と他にこれと同じ程度の大きさと思われる碗の底部があり、黒色に内部を仕上げた口辺部もある。したがって土師製の器は5点を数えることができる。

住居実測図の×印の地点から鉄製の小刀子(5)が出土している。ぼろぼろになっていたため石膏を流して取り上げた。その後整理の段階で、さび部分を取り除いた結果、写真や実測図に見られるように、4つに割れていて、柄の部分と思われるところに、目釘が打たれていることがわかった。重さは35グラムである。

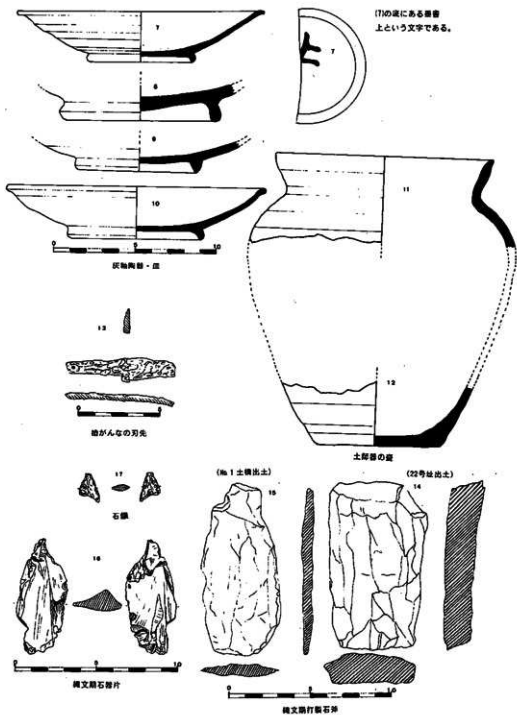
出土遺物は、いずれも細片が多く、(1)の場合も5片の細片を接着してかろうじて、半分の復元をしたもので、これが最も大きく完計となるものは1点もない。過去数回の発掘でも同様であるが、住居に意識的に石を投げ入れたり、破壊したものと思われる、加うるに田の造成時更に破壊されていると考えられる。

いずれにしても、出土品の少ない小規模な住居址ということができる。

22号住居址实测图



22号住居址出土遺物



## 22号住居址

この住居址はC地点とB地点の間にある土手の下から発見され、当初予想したとおり、田の造成時に土盛をした場所である。この大きさの住居址はお玉の森遺跡では、最も多く見られる。西側の住居壁は、B地点の水田造成時に欠き取られたとみえ、住居の半分近くは壁は無く正確な大きさはわからない。図上方中央の積石状の地点は、当初炉址と思われたが、焼土や炭などもなく使用目的は不明である。下方に焼土や炭が多く発見されているので、この地点が、他の住居と同様に炉址であったと思われる。住居のふれは、真北に対して北西に38°である。

出土遺物は、灰釉陶器の完形（11ヶの細片の接着）の(6)をはじめ、皿の破片(7)・(8)他の碗・皿の(8)・(9)の4点以外にも底部5点があり、少なくとも灰釉陶器の碗や皿の10点の存在が確認できる。口辺部の細片53点と、他の部分の細片50点も出土している。(7)の皿の底部には墨書の上という文字の半分が見られる。

土師器では、焼成の良くない(11)・(12)の黒褐色の壺の1個体分（細片75点）と、他に10点の焼成の異なる土師器片がみられる。したがって壺1点と碗の1点計2点の器の存在はたしかである。

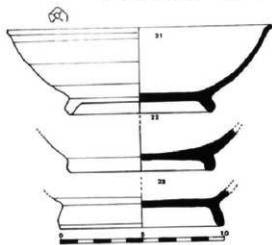
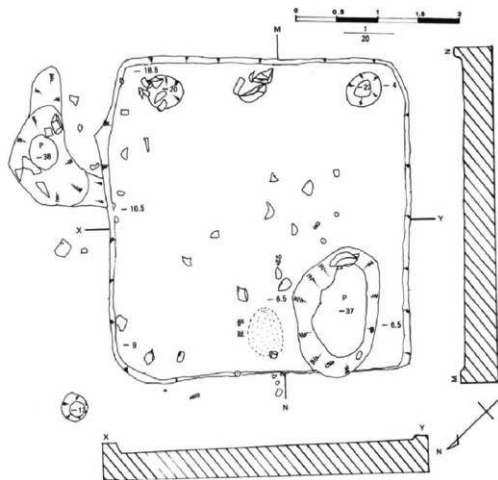
須恵器片は、わずか1点みられるだけである。

お玉の森遺跡で縄文の遺跡や遺構は、北部の沢よりの地点で今まで発見されている。事実今回の発掘でも土構のNo1はそれである、ところが南よりの22号址でも縄文の遺物が発見された。

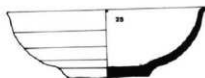
打製石斧(14)と他に半分欠けたもの(15)の1点合計2点、石器では、黒曜石のスクレイパ状の石器(16)と、石鏃の欠けた17mmほどの小形な(17)が出土し、他に黒曜石の剥片3点と、チャートの剥片が1点出土している。縄文中期の土器片が1点発見されているので、この(18)1点で判断することは、むつかしいが他の遺跡と同じ、中期加曾利E期のものであろうと思われる。

鉄製の槍ガンナの刃先(13)が発見されている。この槍ガンナは刃先が小さいことから小形のものと思われ、刃先の重さは21グラムである。

23号住居址実測図出土遺物



31, 32, 33 土器・甕・罎

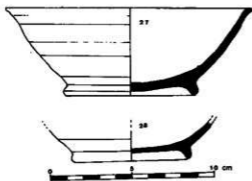
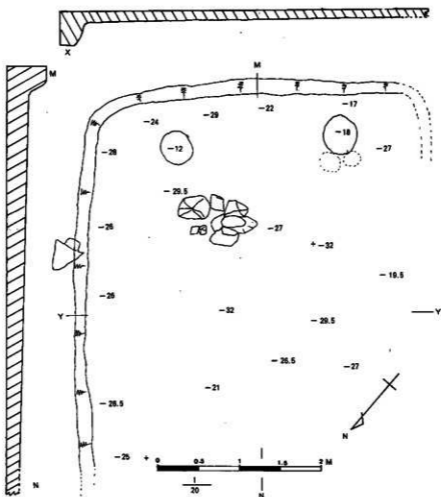


土器・甕

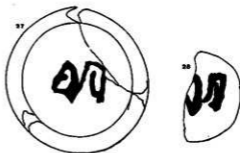


(25) の角切底

24号住居址実測図・出土遺物

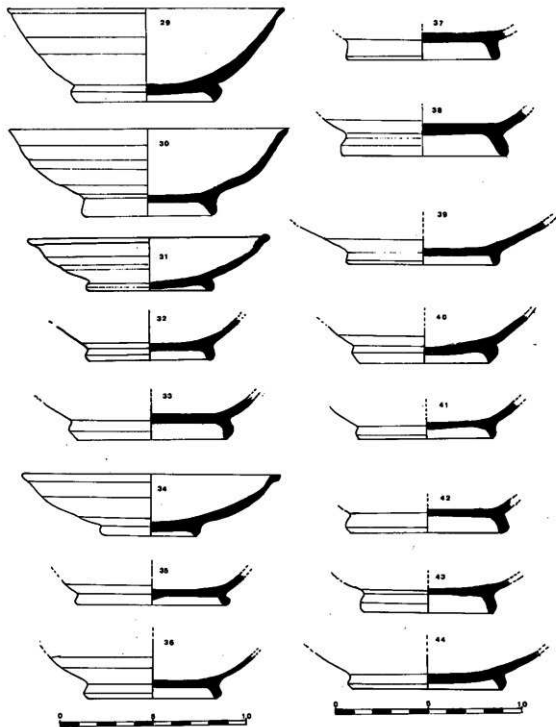


灰胎陶器・碗



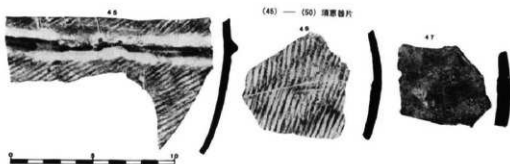
底縁に書かれた墨書文字

24号住居址出土遺物

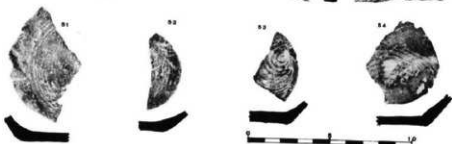


灰輪陶器 碗・皿

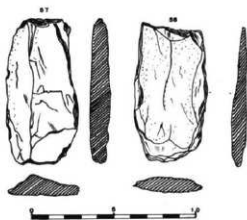
24号住居址出土遺物



(46) — (50) 漆器破片



(51) — (54) 土師器破片 (角切痕)



57 縄文中期打製石斧



(No. 1 土器出土)

縄文中期土器片

住居址以外のグリット出土破片



## 23号住居址

この住居址は、真北に対して北西に48°のふれで造られており、小形である。

炉址は図の下方中央部に焼土がありその中から、土師(25)の黒色に内側を塗り仕上げ碗が出土している。この他厚手の土師器の鉢(小片23点)も出土した。

灰軸陶器では、ほぼ完形に近い(21)碗と(22)、(23)他に2点計4点の底部と、(24)の壺の首の部分が1点、それ以外の部分の小片21点が見つかった。

本遺跡では、大変に珍しい(61)の緑釉の口辺部1点が発見されている。縄文期のものと思われる砂岩の(26)砥石が、1個表土近い層から出土している。

住居内の大きなピットは、炉の横にあり何か炉と関係があると思われるが、薪などを置いたものであろうか。図の右上の住居外のピットは、住居に連なった形になっていて、中に岩石が入っていた。

## 24号住居址

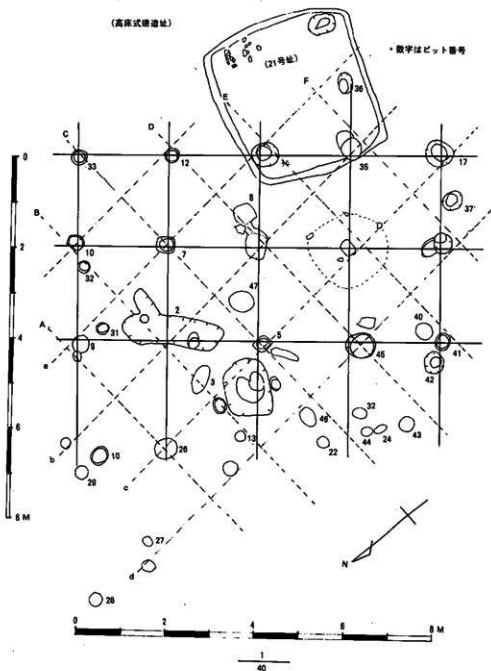
この住居は、22号址と同じく土手下から発見された。大きさもほぼ同じ大きさと推定されるが、田の造成時に西方の半分欠きとられているために、その部分は住居壁はない。真北に対して北西に42°のふれで造られている。出土遺物は破片であるが、数多く出土している。炉址は欠かれた地点にあったものと推定される。

灰軸陶器では、(27)(28)の碗底に、明という字を書いたものが2点発見されている。(29)～(44)までは皆底部でこれ以外に18点の底部があり、合計36点となる。口辺部の破片は、写真とそれ以外とを合計すると73点あり、その他の部分の破片は細片まで合せると、実に191点を数えることができる。須恵器片は、(45)～(50)の図のものとして以外の合計13点。土師器は底部(51)～(54)と他に1点の計5点、底部以外の部分は写真をふくめ合計27点ある。天目茶碗の細片6点と、23号址出土の緑釉と全く同じ碗の破片1点出土している。

完形の器は1点も無く数多くの細片の出土は、意識的に割ったものを投げ入れたとも考えられる。

これ以外に縄文中期の打製石斧(56)(57)の2点と、土器片(無文)の(55)と小片1

# 25号建物址想定図



点の計2点が出土している。

## 25号建物址

住居址と呼ばずに、何故建物址としたかについては、発掘中には高床式の倉庫ではないかという意見もあり、発掘後水系をはり、色々想定をした際、馬を飼育した厩ではないかとか、高床式の住居址ではないかとか、調査委員でも諸説があった。

木曾郡内で中世のこのような、柱を建てた建物は山口村神坂の法明寺遺跡の小規模な住居址につぐもので、委員も経験がなく判断に苦しんだわけである。

パズルの謎解きのようなもので、図の上に様々の建物を想定してみたが、全く思うようにいかないものである。

実線と点線で示したもので、その1部である。

古い時代の寸法は算定してみると次の通りである。(歴史手帖の歴史上の度量衡より)

- ・大室令の大尺は曲尺の1尺2寸で1間は218cm。小尺は1尺で1間は181cm。
- ・和銅の大尺は、1尺で1間は181cm。小尺の1尺は8寸3分で1間は151cm。

また呉服尺の1間は218cmで、鯨尺の1間は227cmである。

図上の実線の間隔は縦横共に204cm。点線A-Fまでの間隔は160cm。点線a-dの間隔は152cmである。

以上の古い寸法と比較してみると、和銅の小尺151cmと点線a-dの間隔152cmが最も近いが、この建物の時代は平安期の21号址に柱穴を掘ってあることから、少なくとも鎌倉期以降と考えられ、時代的に合致せず、柱穴もびったりとはしない。この期は、1間は181cmと思われ、それに合致する寸法は残念ながら見あたらない。実線の場合は、間隔は204cmあるが、縦横の線と柱穴がほぼ図上におさまることができる。したがって現在のところは、正確な1間を単位とした建物でなく、およその検討で建った簡単な建物が実線の位置に建てられていたのではあるまいか。

これ以外にも、さまざまな作図で想定をすることができるが、柱穴になかなか結びつかない。

今後発掘に参加した委員による検討を加え、この面の識者の意見をきくことが必要と考える。

住居址以外のグリット出土遺物一覧表

グリット	種別	縄文石器	土器片	須恵器片	灰釉陶器			鉄釉陶器片	緑釉陶器片	江戸陶器片	現代陶器片	種別	グリット	縄文石器	土器片	須恵器片	灰釉陶器			鉄釉陶器片	緑釉陶器片	江戸陶器片	現代陶器片	
					底部	中片	小片										底部	中片	小片					
B 8						1						K 22				1								
B 10						2						L 6						1				1		
B 11							1			1		L 7										1		
C 7			1					1				L 8						1						
C 8				1								L 15				1		1						
D 8						2						L 21						1						
D 10	1			1								L 26			1									
D 14			2			2						L 28						1				1		
D 15				1								L 31						2						
E 0	1		2									M 5				1		2						
E 8					3	10						M 6						2				1		
E 9			5									M 8						1						
E 10		1				1						M 9						1				1		
F 6				1								M 14						2				1		
F 8					1	2						M 21	1					3				1		
F 9						1						M 28						1						
F 10				1		3						N 7	1				1						2	
F 18						1			1	1		A' 2					2							
F 25						3	1					A' 9				1	1	1					1	
G 6						1						A' 16					1							
G 8	2			1	3	1						A' 17						1						
G 9						3						A' 18					1	1						
G 10			1		1	1						B' 3						2				1		
G 18							1					B' 4					1	1						
G 19				1		1						B' 16			2			2						
G 24						1						B' 18						1						
G 25			1			6						B' 19						1						
H 8						1						C' 1					1	3						
H 9			2			1						C' 2	1		1		1	1	3					
H 10			2		1	1						C' 3					2	2						
H 11						2						C' 4				2	1							
I 7	1											C' 6						1						
I 9					1	1						C' 10					1	1	7				1	
J 6						1						C' 15						3						
J 8					1	2				1		D' 7										2		
J 9						1						D' 9							4	1				
J 15					1	1			4			D' 11						2						
J 26					1				1			D' 15						4						
K 6				1		4						E' 15					1	3						
K 8						1	1					F' 15	1					3						
K 9									1			H' 19						1						
K 21												G' 15						1						1
合 計													9	1	19	8	34	2	124	6	0	17	8	

各住居址・土構出土遺物一覧表

住居	図版	類別	名称	口径	底径	高さ	残存	底面	使用され	施 物	色 調	構成	そ の 他
21号住居址	1	灰輪	碗	18.0	7.9	5.7	2分の1	糸切り	少ない	刷毛により施物	乳灰色	粗	所々に口ひ割れ
	2	"	皿	16.3	9.1	2.2	4分の1	"	あり	"	黒灰色	良	仕上げよくない
	3	"	碗		6.8		5分の1		あり	わずかに見られる	乳灰色	粗	底面ひ割れ
	4	土師	"	18.9	5.7	3.7	2分の1	糸切り	あり	なし	黒褐色	良	もろくなっている
	"	"	"		4.1	4.1	5分の1	"	あり	なし	黒褐色	良	"
この他に ・灰輪陶器の底面小片 8点 ・口辺部小片23点 ・他の部分18点 ・土師器の底面小片 2点 ・黒く仕上げた小片11点 ・鉄製具の小刀子長さ14.3cm、置き25g1点が出土している。													
22号住居址	6	灰輪	鉢	19.5	8.6	8.6	完	糸切り	あり	底面を除く全面	黄灰色	粗	11片の破片残存
	7	"	皿	15.2	8.4	8.4	3分の1	"	"	"	わずかに	中	肩付(上)の文字あり
	8	"	"		9.3		4分の1	ロケロ型	"	刷毛ぬり	黄灰色	良	底面だけ
	9	"	"		7.3		4分の1	へら	"	底面を除く全面	"	良	"
	10	"	皿	16.0	7.9	3.2	8分の1	"	なし	なし	"	中	"
	11	土師	皿	13.4	7.5		3分の2	糸切り	あり	なし	黒褐色	粗	胎土荒い、酸化物あり
この他に ・灰輪陶器の底面小片 5点 ・口辺部小片53点 ・他の部分50点 ・土師器の蓋1個体分(11)(12)は細片75点 ・他の小片10点 ・須恵器小片1点 ・織文申(14)打製石蒜 2点 ・土師片 1点 ・(16)スレーブ 1点 ・石皿 1点 ・小砂片 4点 ・鉄製道具(13)槍がな刀先長さ6.2cm、置き21g1点が出土している													
23号住居址	21	灰輪	碗	16.3	8.6	5.3	5分の4	ロケロ型	あり	底面を除く全面	黄灰色	中	ほぼ完形である
	22	"	"		8.2		5分の1	へら	"	わずかに残る	"	中	
	23	"	"		9.8		6分の1	へら	"	"	"	中	
	24	"	"		8.8		6分の1	へら	"	"	"	中	
	25	土師	碗	12.2	4.9	4.2	3分の2	糸切り	"	なし	茶褐色	粗	内面を除く残っている
この他に ・灰輪陶器の底面小片 2点 首部(24)1点 ・他の部分21点 ・土師器の底面小片 1点 ・他の部分小片23点 ・緑釉陶器(81)1点 ・縄文申(25)(26)土師片2点が止まっている。													
24号住居址	27	灰輪	碗	15.2	7.9	5.4	3分の1	へら型	あり	内上部にあり	乳灰色	粗	肩付(柄)の文字あり
	28	"	"	14.9	6.9	4.9	8分の1	"	"	不規	わずかに	"	"
	29	"	碗	16.8	7.9	5.2	3分の1	糸切り	"	内部にたれている	黄灰色	中	底面が白っぽい
	30	"	"	15.1	6.9	4.6	4分の1	へら型	よく使っている	内上部のみ	黒灰色	"	使用欠けあり
	31	"	皿	13.1	6.8	2.9	4分の1	"	あり	"	乳灰色	粗	胎土荒い
	32	"	"		6.7		8分の1	"	"	わずかに残る	"	"	破ひあり
	33	"	"		8.0		"	ロケロ型	"	下方までたれる	黄灰色	"	"
	34	"	皿	13.8	5.0	3.3	"	"	"	内上部のみ	"	中	"
	35	"	"		8.0		12分の1	"	汚れあり	内部のみ	"	"	茶褐色の汚れあり
	36	"	"		6.8		15分の1	へら型	"	両面にあり	乳灰色	"	"
	37	"	"		8.0		"	"	あり	"	わずかに	粗	"
	38	"	"		8.8		"	"	"	"	黄灰色	"	"
	39	"	"		7.8		"	"	"	内部のみ	乳灰色	中	底面が白っぽい
	40	"	"		6.9		12分の1	ロケロ型	なし	フツツしている	黒灰色	粗	底面が荒えている
	41	"	"		7.1		15分の1	"	あり	不明	わずかに	"	"
	42	"	"		8.2		20分の1	へら型	"	"	"	"	"
43	"	"		6.9		"	"	なし	わずかに残る	"	"	"	
44	"	"		8.0		"	ロケロ型	あり	"	黄灰色	"	胎土荒く不良	
この他に ・灰輪陶器の底面小片18点 ・口辺部小片73点 ・他の部分小片191点 ・土師器の底面(51)～(54)と他に1点計5点 ・他の部分小片27点 ・須恵器破片(46)～(50)と他に7点計13点 ・緑釉陶器小片(59)1点 ・縄文申(打製石蒜(56)(57)の2点 ・土師片(55)と他に1点 ・黒灰目(58)の破片 8点 が出土している。													
地 下 土 層	・縄文申(打製石蒜(15)1点、土師片1点が出土している。												

## 調査の結果

### 1. 住居址から

今回の発掘では、21、22、23、24、25号の住居址を確認することができた。斜地を削り取って上・中・下段とし3枚の水田を造成しているの、削り取られた部分には当然これ以外にも住居址はあったと思われる。

21、23号は小形の住居址であり全体像をつかむことができたが、22、24号は本遺跡では中形の住居であるが、田の造成時に削られて残念ながら全体像は一部つかめない。21、23号は、ほぼ方形で、22、24号は、方形に近い長方形である。

本遺跡の多くの住居址が、そうであったように、各住居には人頭大の岩石を意識的に投入したと思われ、特に22、24号址には岩石が多かった。

炉址は本遺跡では、ほとんど西側の壁中央部にあったが、21号址だけは、東側隅にあった。他の住居址は削り取られていて、はっきりしなかったが、23号址は西側中央部の壁附近から焼土と共に土師碗が発見されている。この住居址には内部に大きなピットがあり、使用目的はさだかではないが、炉の薪などを置いたとも考えられる。25号建物址は、柱穴ばかりであるので、どのような高床式の住居もしくは、他の使用目的の建物があったか判定することはできない。建物の大きさ構造等についても、各種の考えが柱穴から想像され、想定が困難である。木曾郡下でも2回目の発見であり、今後の研究課題としたい。

### 2. 発掘全面から

本遺跡は、広いお玉の森遺跡の東方上部山よりの一部であり、水田地帯であり前述のように田の造成時に破壊されている遺跡である。事実断面図の東西線G-H図に見られるように、斜面を削り取って三段の平らな水田としている。

表層は黒土で、水田の耕土であり、これは厚い所も薄い所も見られるが特に上段C地点は浅い。次の層は水が漏らないよう叩き固めた田の床の部分で茶褐色の赤土に小礫の混じった地層である。すぐに地山となっている地点が多いが、中には埋め立て時の小石と砂の混じった層があった。

もともと上部の沢が押し出した一帯で水田以外の場所は、砂礫の多い土地であって、縄文遺跡は遺跡の北側の沢に近い部分に多く、平安以降の遺跡は南側の斜地一帯である。事実今回は北寄り、縄文の土構が発見されており他の平安住居址は南側である。前回までの発掘調査はすべて斜地の畑であり、土中のピットは、ほとんど桑の木の根の跡であった。しかし今回は水田のため異り、ピットは柱穴とみられる。

設定したグリットは2m×2mで、実に520ケをもうけたわけで、面積2080㎡となる。土手下の発掘調査を加えれば更に広い面積となる。この広い調査地点の調査が行えたのは、表土のはぎ取りが機械力であったことと、C地点上段の水田の黒土層が極めて薄かったことである。

### 3. 出土遺物から

出土遺物は、水田造成時に土の削り取りが行われているので、遺跡A・B・C各地点全面に陶器片が小片、また細片となって分布していた。別表のように小量ずつ82グリットから出土してその数228点を数え、縄文時代から現代陶器まで混じっているが、その中160点が灰軸陶片である。

住居址からの出土品は、灰軸陶器片総数490点、土師器片157点、須恵器片14点、緑軸陶器片2点、縄文土器片3点、他に鉄製具2点、石器類が出土している。

全出土遺物の百分率は次の通りである。灰軸陶器片71.2%、土師器片19.2%、須恵器片2.4%、緑軸片0.2%、縄文土器片0.4%、鉄軸陶片1.3%、江戸陶器片0.9%、現代陶片0.9%、縄文石器2.0%、鉄製具0.3%である。

このことから、住居址出土遺物が段違いに多く、グリット出土は大変に少ない。また出土器の、71.2%は灰軸陶片で、いかにこの陶器が多いかわかる。ついで土師器の19.2%で多くなっている。他は率でいけば非常に少なくなっている。

当時使用された器類は、灰軸陶器が主で、次に土師器が使用され、須恵器や緑軸陶器の使用は、わずかであったと想像される。

24号址は、出土品が多く灰軸陶片の底部だけで推定すると36個の皿や碗があり、土師器の5個を加えると更に多くなり、一軒の家の持物とすると、当時としては異状に多く、特別の家であったとも考えられる。細片が多く、意識的に何らかの理由で投げ入れたものとも思われる。

23号址と24号址で、緑軸の陶片が1片ずつ発見された。この二片は同一の器の破片で、

15メートル離れたそれぞれの住居址で出土した。田の造成時に移動したものと考えたい。この緑釉片は、緑が薄い色で胎土との関係かピンク色じみている。所々に意識的につけたと思われる斑点が美しく入っている。口辺部から見て鉢であると思われる。

須恵器は叩き目がほとんど付いていて、中に入らないのも若干あるが、いずれも焼成は固くよくできている。わずかしか出土していないが、破版から見て壺であろうと思われる。

天目茶碗の小片が出土していることは、平安期以降室町期にも何等かの生活がいとなまれていたことであろう。

鉄製具では、21号址出土の小刀子は、ほぼ完全に刀身が残っている。本お玉の森遺跡では、以前に鎌や鉄鍬の出土があるが、小刀子をはじめである。他に槍がんと鉄鍬(矢尻)らしきものが発見され、合計3点の出土であった。

縄文時代の遺物の主たるものは、打製石斧でこの付近は表探でもよく発見されている。小型のもので大型のものはなかった。土器片は無文が多かったが、1点中期の土器片とわかる土器片があった。これは土構で発見されたものである。

住居址は発見されなかった。

遺物から判断すれば、今回の発掘地点は、平安後期の集落の一部であり、縄文中期の遺跡も北よりの地点にあった。鎌倉・室町期にも全面でなく一部では生活がいとなまれたと思われる。

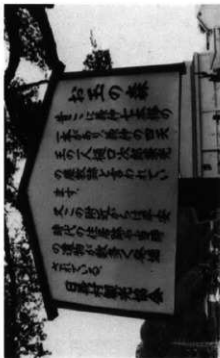
#### (付記)

- ・発掘関係の地図・実測図・写真等は、全遺物と共に日義村教育委員会に保存されている。
- ・発掘調査された遺跡は、現在日義村のテニスが現在完成して、村民により使用されている。





姫小松の大きな小丘



この附近のいわれを書いた説明板



園芸物の産地 全貌



体育館・駐車場之下段A地点



中段 B地点



下段A地点



上段 C地点



ユンボとダンプにより表土取り除き作業



発掘中のA・B・C地点 全景



22号住居址から発掘された唯一の完形品  
灰釉陶器の鉢である。四方に内側にむけて  
小さなくびれをつけてある。

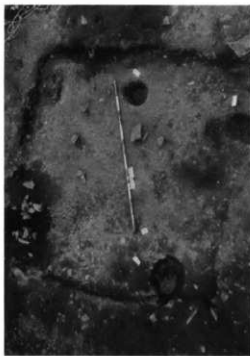


23号住居址から発掘された灰釉陶器の  
碗である。手前の一部欠損している。



21号住居址から発掘された鉄製の  
小刀子 上図右側に小さな目釘金  
が見える。

21号住居址



21号住居址



21号住居の灰皿

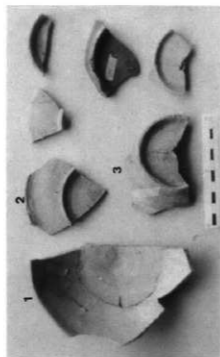


土師甕の出土状況

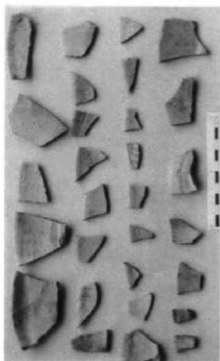


灰桶の出土状況

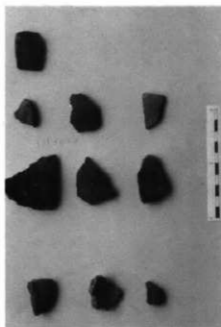
21号住居址出土遺物



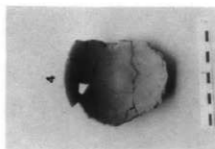
灰釉陶器碗・皿の底部



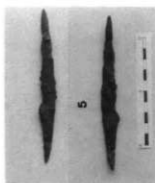
灰釉陶器碗・皿の口辺部



黒色の土器器片



土器器碗



鉄製の小刀子

22号住居址



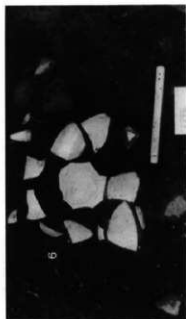
発掘状況



22号住居址

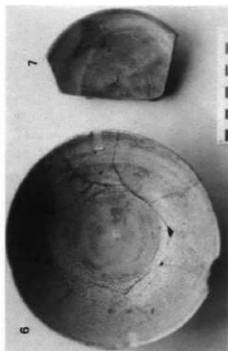


灰輪陶器皿出土状況

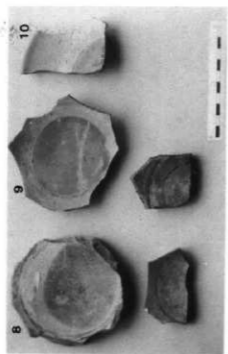


灰輪陶器皿出土状況

22号住居址出土遺物



灰釉陶器・碗皿



灰釉陶器碗・皿底部



灰釉陶器 口辺部



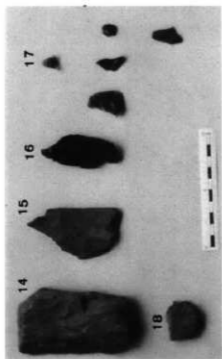
土器器 量 (1 個体分)



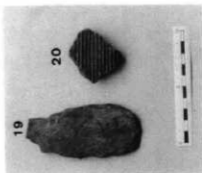
22号住居址出土遺物



土師器 壺・碗



縄文期・打製石斧・石器・土器片



縄文期・打製石斧・土器片



鉄製槍がんな刃先？

23号住居址



发掘状况



23号住居址

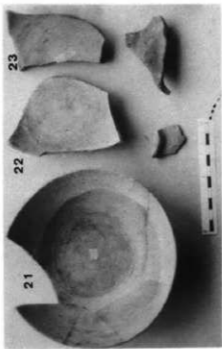


灰輪器出土状况

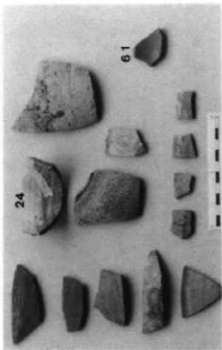


土師器出土状况

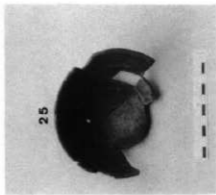
23号住居址出土遺物



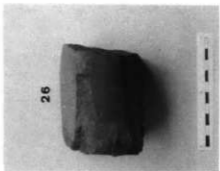
灰輪陶器 碗皿



灰輪陶器片



土輪器・碗



磁石(砂岩)

24号住居址



築造状況



築造と認められたがもうではなかった。

24号住居址

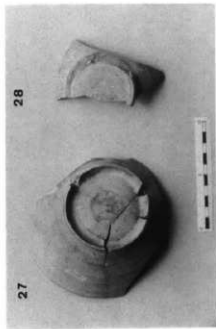


灰桶皿出土状況

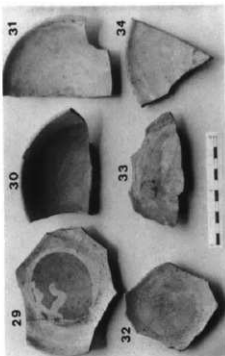
24号住居址出土遺物



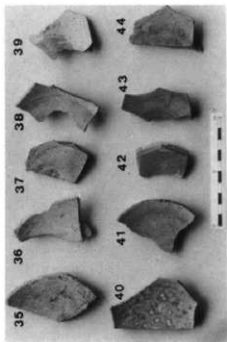
灰輪陶器・碗



27・28の底部断面



灰輪陶器 碗・皿

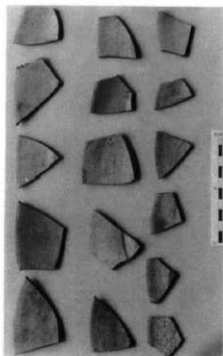


灰輪陶器底部

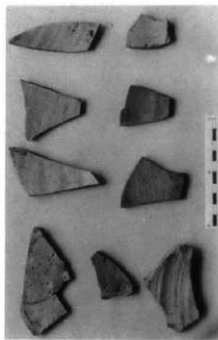
24号住居址出土遺物



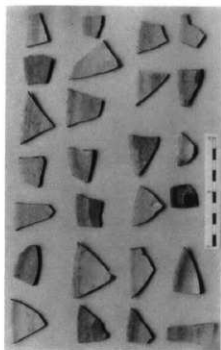
灰釉陶器 藍部



灰釉陶器 口辺部

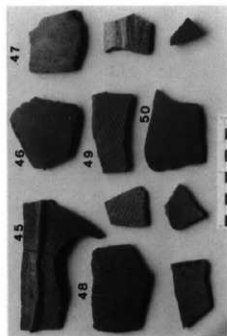


灰釉陶器片

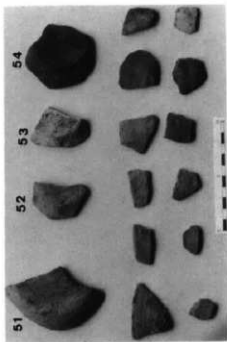


灰釉陶器 口辺部

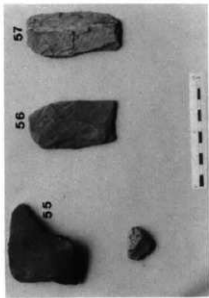
24号住居址出土遺物



須臾器片



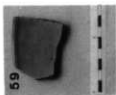
土師器片



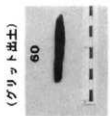
縄文期土器片・打製石斧



天目茶碗



縁軸陶器片



(グリット出土)

鉄製具  
鉄型の鏝か?

25号建物址



25号建物址柱穴



No1編文の土構



柱穴の多くは柱をささえる石が入っていた。



No. 1土構より打製石斧出土状況



発掘風景



槽川小学校郷土クラブの児童



木曾高校地歴部、村のチニスクラブの皆さん

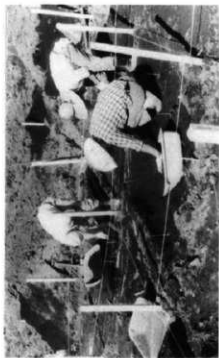


手前は実測と、後は児童の発掘風景

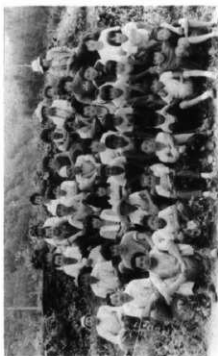


A地点の発掘風景

発掘風景



各グリットに1名ずつ入って発掘を行った。



発掘参加者一同の記念写真



太田先生以下木曾高校地歴部一同

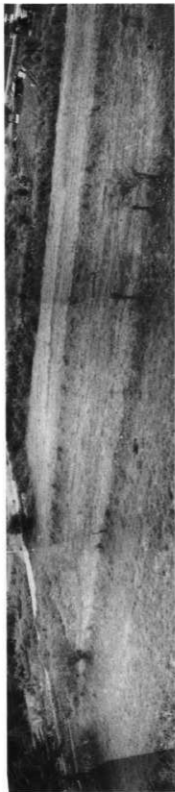


神村先生をはじめとする調査委員を中にして



発掘参加者一同の記念写真

着工前の遺跡



発掘調査中の遺跡



発掘調査後完成した村営庭球場



テニス風景



---

非売品

発行 昭和58年8月31日

編集 長野県木曾郡日義村  
日義村教育委員会

印刷 ㈱安藤印刷(02642)2-2353

---

